

はじめに

21世紀の日本の政治は変化に富み、さまざまな方向への転換が行われてきましたが、有権者は多様で、仕事や遊びに専念する「政治的無関心」、政治を利益追求の手段だと割り切る「利益政治」、ともかく強そうなリーダーを支持する「ポピュリズム」、強権的な政治を批判する「リベラル派」などが併存します。

こうしたなかで政治学は、細分化された専門研究の傍らで、社会や学生にどのように語るべきなのか。「民主主義を支えるために、有権者は関心を持ち参加するべきだ」が本筋ですが、「政治は面白いよ」という案内もたいせつです。実際、「誰がどんな作戦で勝つのか」と観戦しても、「なぜ変化するのか」と知的に分析しても、政治は興味深いものがあります。また「保守が日本を強くする」との期待と「右傾化」「一方的改憲」への不安が聞かれる現状では、バランスよく賢く考えるための情報が望まれます。

おそらく政治学は、意外に現実の役に立つのでしょうか。外国では「マスコミ記者や議員になるために有利」という話も聞きますが、それは政治が、人々を助ける政策から独裁や戦争までを含む世界であり、政治学がそうした現実を見つめ、適用可能な（中範囲の）理論や価値観を提供する学問だからでしょう。そうした視野の広さ、社会の現実への関心、観察、思考の技術は、（他の専門の勉強と併せれば）、社会のさまざまな仕事・活動で役立ちます。

日本を中心とする政治や民主主義についての教科書を、僭越ながら「ガイドブック」と名づけたのは、基礎知識の分かりやすい説明に加えて、そこから政治学研究の世界へと案内し、また複数の枠組みや視点、賛否両論を情報提供して、自分でも考えていただく趣旨からです。

また、副題の「民主主義入門」は、「民主主義イコール多数決」と単純化する風潮のなかで、政治制度、歴史、理論、選挙の実際、憲法原理などを学んで理解する方がよいという勧めです。

政治に関する情報を見ると、あくまでも一般論ですが、政治家や評論家の手によるものは経験にもとづき分かりやすくても、「一刀両断」に陥り、根拠となる資料や文献も示さないことがあります。

この本は、政治学の研究成果や資料・データを参考にしながら、かつ明快に読みやすく書きました。

ここで重要なのは、政治を勉強するとき、知識を暗記し、裏話やトリビアを楽しむだけでは足りないということです。何といっても意見や利害が分かれ対立する（それが意味のある）世界ですから、複数の立場や論理を知り、ときどき疑い、どちらが妥当かを考え、論じる力が求められます。

そこで、「ガイドブック」を目指す本書は、そうした自学やディベート、知的探求を進めやすいように、いくつかのしくみを設けました。

- ◎各章末で、テーマに関する基本的な文献やウェブサイトを紹介した。
- ◎参考文献は、本文でカッコ内にページ数まで案内した。読者は効率よく、自分で研究・確認するための情報源にアクセスできる。……カッコの文献のタイトル等は、法律文化社 HP の教科書関連情報『新版 日本政治ガイドブック』文献リストを参照していただきたい。
- ◎問題を多面的に考え、またディベートにも活用できるように、賛否両論など複数の主張を紹介し、さらに、それをまとめた【議論の整理】の表を、重要な問題について置いている。……まずこの【議論の整理】を眺め、表の空欄に自分の意見を書いてから、本文を読むという順序もある。
- ◎図表 6-1 の略年表で、近現代の政治や社会の有名な場面をリアルに「体験」できる映画を紹介しているので、鑑賞していただきたい。

この本の構成について説明します（詳しくは、I～IV部の初めの解説を参照）。

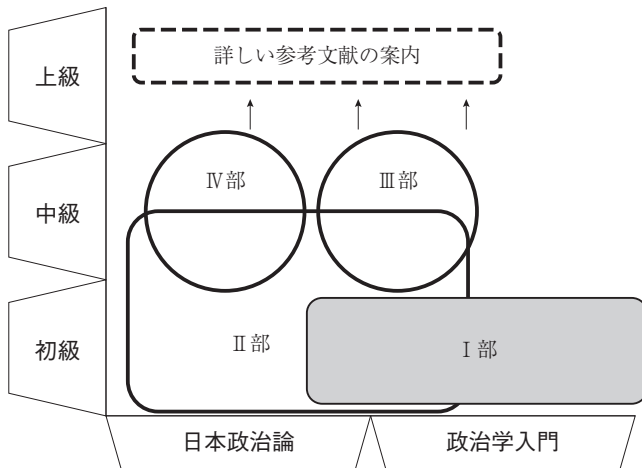
第I部「政治学入門」は、広い政治学の全体を10のテーマに整理し、それぞれキーワードを理解しながら学びます。「35ページで学べる政治学入門」ですが、各種の文献・ウェブサイト案内や注で、さらに深められます。

第II部「日本政治の基礎知識」は、日本政治のしくみの中核、つまり国会、

政党、選挙、内閣・行政、地方自治、さらに政治的な座標軸（対立軸）や理念を説明し、「100ページで読める日本政治入門」になっています。

Ⅲ部とⅣ部は、重要な政治的テーマを掘り下げます。第Ⅲ部「民主主義とポピュリズム」は、民主主義の多面性、その特定の面だけを利用するポピュリズム、そして現代日本の選挙・政党間競争の研究です。第Ⅳ部「憲法と統治機構をめぐる議論」は、ニュースでもよく取り上げられる、憲法「改正」、首相公選、国会議員定数減、参議院改革、道州制をめぐる論争を解説します。

教科書がふつう、制度やアクターを順に章として並べるのに対して、この本のⅠ、Ⅱ部とⅢ、Ⅳ部は、「基礎と発展」の関係です。つまり、Ⅰ、Ⅱ部で触れた重要問題のいくつかに、Ⅲ、Ⅳ部が再び光を当て考察を深める構造になっています。つぎの図のようなイメージになるでしょう。



目的や関心に応じて、いろいろな読み方ができます。

「初級コース」および「中級コース」については、図に示した通りです。

また、教養レベルの政治学入門としてはⅠ、Ⅲ部（関係する日本の事例についてはⅡ部）が、専門レベルの日本政治論としては、Ⅱ部、Ⅳ部およびⅢ部7、8章が、それぞれ利用できます。

なお、論争的なテーマを扱う場合、一方の側に立つスタイルと、両論を併記するだけの「完全中立」スタイルがありますが、この本は中間を行います。つまり、両論（と参考文献）を紹介するが、事実と論理から導き出された筆者の意見も述べ、深めるべき議論のポイントに触れています。

また、政治学の研究書としては、国際比較もしながら、日本政治における争点軸、自民党優位の復活（リベラル政党はなぜ弱いのか）、「市民」と「大衆」の政治意識、ポピュリズム（扇動政治）の定義と実証研究、扇動型住民投票、道州制の光と影、大阪都（大阪市廃止分割）構想、「一方的改憲」と「合意型改憲」などについて、比較的知られざる情報や新たな仮説を提示しようとしてきました。こうした一アメリカ政治学の理論に準拠しにくいため―「日本で重要なのに実証研究が少ないテーマ」が、より研究されるきっかけになればと願います。

大学の教養科目（政治学入門、日本政治入門）の教科書、および専門科目（日本政治論など）の参考書として書きましたが、一般の方々、マスコミ関係者、さらに政治家の方々にも、読んでいただけるかもしれません。

この本が、単純化しても、神秘化しても、強者に委ねても、見捨ててもいけない日本政治や民主主義について、知識、複数の視点そして分析能力を身につけ、合理的な意見を持ち、投票・政治参加するための「ガイドブック」として多少とも役立てば、幸甚に存じます。

今回の新版発行に当たっては、全面的な改訂・追加を行いました。

- 第I部「政治学入門」を新設した。
- 既存の各章も見直し、データや記述を更新した。
- とくに、7章（ポピュリズム）、8章（政党と選挙）、9章（改憲）については、2017年衆議院選挙までの現実政治の動向を反映させるなど、全面的に書き直した。

2017年秋

村上 弘